

図書紹介

『世界を変えた50人の女性科学者たち』

(レイチェル・イグノトフスキー著 野中 モモ訳、創元社、2018年)

片上 平二郎

立教大学社会学部准教授

この本は科学の歴史の中であまり顧みられることがない女性科学者たちを紹介することで、“女性科学に向いていない”という世間の思い込みを解除していこうとしていく。彼女たちはたしかに存在し、そして、大きな成果を残しているはずなのに、なぜか歴史の中でその存在は“忘れられて”しまっている。ユーモラスかつ淡々とした態度でそんな彼女たちの仕事を紹介されていくが、その態度の裏側には彼女たちの存在を歴史から隠してしまっている世間や社会に対する怒りと批判的な態度があることも読んでいけばよく伝わってくる。ちょうど2018年の日本では、医科大学の入試における「女性差別」問題が露わにされたが、科学と性差の問題はまさにわたしたちの社会において考えるべき課題としてある。

2018年は、本書だけでなく、サッサ・ブーレグレンの『北欧に学ぶ小さなフェミニストの本』やエレナ・ファヴィッリ、フランチェスカ・カヴァッロによる『世界を変えた100人の女の子の物語』など、子ども向けられたフェミニズム書が多数翻訳された年であった。フェミニズムに関する啓蒙書はともすれば“正しい”主張を“上から”伝えようとする“マジメな”ものであると思われるが、これらの書籍はどれもがユーモラスなイラストに彩られ、読者（これは子どもだけではなく、大人も想定されていることと思う）に考えながら読んでもらおうとする態度によって書かれたものである。単に「勉強する」ものとしてではないかたちで、フェミニズムを「ポピュラー」なものとして広げていこうとする野心的な試みがここにはある。

また、これら子どもを主な対象とした書籍だけでなく、より過激化したブラックユーモアによってフェミニズムと科学の関係を考えようとする書籍も2018年に翻訳されている。ジャッキー・フレミングの絵本『問題だらけの女性たち』は19世紀のイギリスで女性に向けられた偏見と固定観念によってできあがった一見科学風な物言い、実際には女性たちの知的な蓄積を押し潰してきた歴史を皮肉なかたちで描き出している。より過激なスタイルを選択しているのが、スウェーデンで議論を巻き起こしたというリーヴ・ストロームクヴィストのコミック『禁断の果実 女性の身体と性のタブー』だ。この本は、女性器や生理、オーガズムといった女性の身体にまつわる科学風の物言いがつくってきた世界を笑い飛ばしながら、批判している。絵本やマンガといった「ポピュラー」なスタイルを用いながら、フェミニズムの社会批判性がこれらの本の中では先鋭化されていっている。

このような本が同時並行的に日本で紹介される動きが出てきたことは偶然であると思えず、#MeToo文化などが広まっていく現在の時代状況とも連動しているはずだ。書店でもこれらの本を中心としたフェミニズム書籍のブックフェアなどがいくつか行われていたという。たまたま数年前に行ったニューヨークの美術館の書籍コーナーで本書をみつけ、このようなポピュラーなスタイルのフェミニズムが根ざしている文化状況をうらやましく思いながら買って帰ってきもしたのだが、ようやくに日本国内でもそのような成熟に向けた状況が訪れたのかもしれない。

この年報が刊行されるころには『世界を変えた50人の女性科学者たち』のシリーズである『歴史を変えた50人の女性アスリートたち』の翻訳も刊行されているはずだ。科学と同様にスポーツもまた、女性たちが常識という名の思い込みによって歴史の中で抑圧されてきたジャンルである。まだまだ、歴史の中で本来記憶されていてしかるべき人々の存在が、世間の思い込みによって覆い隠されてしまっている他のジャンルがあることだろう。“忘れられてしまった”人々に目を向けることは、われわれが生きている世界と歴史の豊かなありえた、そして、ありえる可能性を切りひらくことにつながるはずだ。